# 川のある町の思い出

保　立　俊　一

柳が川面に影をおとす、その影の中を小さな鮒が水面に口をつき出して呼吸をしている。パクパクと小粒のあわを出しながら。子ども達は網をもち、釣竿を持って小魚を追いまわす。暖かい春の陽射しの中で。

町の真ん中を流れる川のふちで見られた風景、これが五十年前の土浦の風物詩であった。

流れは町の中を縦横に走っており、小舟でほとんどの町がつながれていた頃の私の町は、ふるさとと呼ぶにふさわしい暖かさがあった。先日、佐賀　進先生の「スケッチで綴るふるさと土浦」が発刊され、老人達に心のうるおいを与えたことは、やはりその時代に生きた人達にふるさとの暖かさを思い出させ感じさせたものであると思う。

老人の集まりでよく言われる事に、「昔はよかったなあ!!」という言葉がよく聞かれる。文化も進まず、機械化も出来ていない、娯楽も少ない。身体を使って精いっぱい働き、苦労ばかりが多かった生活が何でなつかしく思い出させるのだろう。私は、そこに人間があったからだと思う。人間同志の心のつながりの中で、世の中のすべてが行なわれていたからだと思う。町の中のすべての人が暖かい思いやりの中でのつき合いをしていた其の頃の事をなつかしく思い出させるからなのだろうと。

正月から歳の暮れまでのそれぞれの時季にそれぞれの細かい心づかいがなされた行事が行なわれ、行事の度に隣近所のつき合いが、それも心の底からの信頼感をもって行なわれていた。それが老人達の心の底になつかしい思い出として残されているのだと思う。

その頃の私たち子どもと川とのつながりは非常に密なものがあったし、川に対する愛着があった。遊びが川をはなれては考えられないような毎日の生活であった。自然の中に自分達をとけこませて、その中で小さな幸せを喜び合っていたのだ。

現在、こんなに人智が進み、機械化され、人間の幸福という問題についても討論が行なわれているのに、何か心の中がうつろになるのはどうしてだろう。人達がお互いに牽制し合い、だまし合い、少しでも自分だけが人よりましな生活が出来る事だけを目標に生きている。そんな処に本当の幸福があるのだろうかと、むなしい思いをするのは私だけであろうか。